
 卷 頭 言 

社会福祉法人日本点字図書館

館長 本 間 一 夫

盲人が就く職業を分類するには、いくつかの基準があるであろう。その一つとして、私は、次のような見方もあろうかと思うのである。それは、仕事の対象が盲人であるか、あるいは正眼者であるかということによる分け方である。盲学校の教師や盲人福祉施設の職員などは前者であり、三療業者や箏曲の師匠、それにいわゆる新職業といわれる電話交換手、プログラマー、一般公務員、企業勤務者などは後者に属するであろう。

前者としては、たとえその職業が正眼者の中で働く場合であっても、対象者からは同じ不自由を持つ者として親しまれ、時には尊敬もされるだろうし、同僚からも何かと重要視されて、職場の人間関係は比較的うまくいく場合が多いのである。要するに本人は気楽に働けるのである。

ところが、後者の場合はなかなかそうはいかない。三療業や琴の師匠は個人営業だから別として、いわゆる新職業の場合は、盲人は大勢の正眼者の中で一人で働かなければならないのだから、本人の仕事の能力はもちろんだが、職場での人間関係には特別の気くばりが必要なのである。盲人の職業的能力が、特別のケースを除けば、正眼者に優るとはまず考えられない。失明は、確かにそれほど大きなハンディなのである。特に知的職業の場合、事務処理能力が問題だとはよくいわれるところである。最近、ワープロやパソコンを活用することによって、その点はかなり改善されてきているようではあるが、なお、「読む」と「歩く」ことには問題が残る。どうしても職場の上司や同僚の協力を得なければならないであろうし、雇い主の理解も必要であろう。

「誰誰が企業〇〇に採用された」というようなニュースがよく流れる。今年は大卒者の一般企業への就職状況が、例年になくよかったようである。それは、本人はもちろん、関係者の大きな努力の結果であって、大変喜ばしいことなのであるが、そうしたニュースを聞くたびに私は思う、「一人の障害者として大

巻 頭 言

勢の正眼者の中で働く本人は、それが全盲であるならば、これから大変だろう」と。そこにはストレスがたまりはしないかということである。

人間最大の幸福は、自分の職業に誇りと生きがいを感じて毎日を愉快に働くことである。そうなるためには、本人が自分の障害に甘えることなく、人に倍する努力をすべきであることはいうまでもない。それと同時に、盲人の福祉や教育に携わる者たちは、その一人一人の心の動きに気をつけて暖かく見守り、常によき相談相手となるべきであろう。そうした職場を今後ますます広げてゆかなければならない時だけに、私はこの点をはっきりと押さえておきたいと思うのである。